

# 『一条撰政御集』「とよかけ」の部の形成について

大貫正皓

## 一 問題の所在

藤原伊尹の家集『一条撰政御集』は、冒頭から四一首まで（以後「とよかけ」伊尹を、「大蔵の史生くらはしのとよかけ」という単位卑官の人物に仮託し、内容を展開している。四二首以降は虚構のない伊尹自身の歌の収載で、「とよかけ」を第一部、四二首以降を第二部と構成上二部に分類が可能である。両部の関係については、一代の権力者伊尹を大蔵史生なる人物に仮託し得る者は伊尹その人であろうこと、及び『大鏡』伊尹伝の「いみじき御集つくりて、とよかけとなのらせ給へり」とある記載から、「とよかけ」を自撰、以降の第二部は「とよかけ」成立以降に後人が伊尹歌を編纂した他撰とする認識が鈴木棠三氏<sup>(1)</sup>、難波喜造氏<sup>(2)</sup>、片桐洋一氏<sup>(3)</sup>らにより示されて以後、定着してきている。

また「とよかけ」の構成については全四一首中、二三番歌の左注を境に前半部、後半部に分けられるとする指摘が内田強

氏、堤和博氏<sup>(4)</sup>によって示されている。「とよかげ」二一、二二、二三番歌は、豊蔭が「うちわたりなりける人」のもとに通ったが、「うちわたりなりける人」ではなく、その人に仕える女童「のべ」と贈答を交わし、後に関係を持っていく一連の展開をみせるが、二三番歌左注「そのをりはいとをかしとおもひけることゞも、ありけれど、ことなることなきひとのうへはみなわすれにけり」の記載について、平安文学輪読会編『一条摂政御集注釈』（以後『注釈』<sup>(6)</sup>）では「その当座はまことに興ありと思つたこともいろいろあつたが、高からぬ身分のものことはみな忘れてしまった」と訳し、注では「大藏史生豊蔭の身分ならばふさわしい相手ともいうべきであるのに、このような言葉が使われたのは、つい本来の身分意識が出たものであろう」と、冒頭より一貫していた豊蔭への仮託がここで一度途切れ、伊尹の立場としての身分意識が表出したものと理解される。<sup>(7)</sup>この読解を考慮の上で前掲内田氏はここを境に意識のつらなりが小休止しており、前後に分かつべき箇所と判断され、そこからさらに堤氏は、人物の心境叙述、『伊勢物語』の影響を受けたと思われる語り手の心境叙述が前半部のみにみられることや、左注の言辞が前半部には一一箇所あるが後半部は一つしかないこと、また前半部に比べ後半部は各段における統一した主題が見出せないことなどを検証され、後半部は作者伊尹が未定稿のまま筆を置かざるを得なかった状況を想定されている。さらに曾根誠一氏<sup>(8)</sup>も、前後半という認識ではないが、二三番歌左注について「歌物語化の試みはここで放棄されている」と認識され、作者伊尹による歌物語化の造形の変節を想定されている。

「とよかげ」の構成についてはこのように、二三番歌左注を契機とした堤氏の未定稿説や曾根氏の歌物語造形の変節という理解がこれまでなされており、また、それらはいくまで作者伊尹の所為によるものと見做されてきた。しかし、「とよかげ」に先行する歌物語との関連、また呼称の性質を考慮していくと、前後半部に区分される構成について、また後半部の伊尹による未定稿、及び物語造形の変節という見方については、異なる理解がなされるべきものと考える。以下そのことを述べたい。なお「とよかげ」全四一首の構成は堤氏、曾根氏同様、Ⅰ段（一、二番歌）、Ⅱ段（三―七番歌）、Ⅲ段

(八一—一番歌)、IV段(二二—二〇番歌)、V段(二二—二三番歌)、VI段(二四—三〇番歌)、VII段(三一—四〇番歌)、VIII段(四一番歌)に区切る。

## 二 「とよかげ」と先行歌物語の関係

I段の「はやうの人はかうやうにぞあるべき、いまやうのわかい人は、さしもあらで上ずめきてやみなんかし」とある左注は『伊勢物語』の「むかし人は、かくいちはやきみやびをなむしける」(一段)、「むかしのわか人は、さるすける物おもひをなむしける。いまのおきな、まさにしなむや」(四〇段)の注記が思い起こされるものであり、「とよかげ」が先行する『伊勢物語』の影響を受けている可能性を示唆する。本稿はこの影響の点を考慮し、『伊勢物語』各章段の内容、主題の面を「とよかげ」がどのように摂取し、物語を展開したのか、ということに着目する。また『大和物語』、『平中物語』の摂取状況も考慮に入れていく。前者は天曆五年(九五二)成立説<sup>9)</sup>、後者は康保二年(九六五)頃までの成立説<sup>10)</sup>が代表的な推定成立年代として存し、伊尹の生没年(延長二年から天禄三年(九二四—九七二))を考慮すれば、当代のゴシップを題材とした両歌物語は伊尹の文化圏において無視できない存在と考えられるからである。

### 〔I段〕

冒頭段は豊蔭と身分の変わらない女との関係となる。豊蔭歌に至る「としつきをへてかへりごとをせざりければ、まけじとおもひていひける」の一文から、豊蔭が女から一向に返事を貰えなくなった状況におけるやりとりであることが知られる。そういったなかで詠んだ「あはれとも」の歌により、豊蔭は女からの返歌をかううじて得る展開を示すが、この段の眼目は女の二番歌「なにこともおもひしらすはあるべきをまたはあはれとたれかいふべき」の「または」の表現にあると思われる。「または」を考慮すれば女の歌は、「あなたとのつらい様々な事を思い知っていない自分であれば、あなたに

「あはれ」とも言おうが、それを知っている今、また「あはれ」などと誰が言おうか」と理解されよう。つまり、豊蔭と女との間には以前交際があり、それが終焉した後に再び豊蔭が関係を迫っている状況が想定されるのである。<sup>(1)</sup>他出資料の『拾遺集』（卷一五・恋五・九五〇・謙徳公）では返しの女の歌はないが、詞書に「ものいひ侍ける女」が「後につれなく」なつたことが記され、また恋五に位置づくことから同様の状況が想定される。

このようなことを考慮すると、I段左注の「はやうの人はかうようにぞあるべき」との賞賛は、既に交際の絶えた女に再び懸想をし、脈がまだあることの証ともいえる返歌を詠み出させた下衆豊蔭の類まれな行為にあつたと考えられてくる。ここで豊蔭の行動を類まれとするのは、例えば『伊勢物語』三二段のように、

むかし、ものいひける女に、年ごろありて、

いにしへのしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな

といへりけれど、なにも思はずやありけむ

と、先行歌物語にも復縁を求める男の話は見出されるものの、豊蔭のように破局後に男の行為により返歌を得たり、復縁していく内容の話が確認されないことに拠る。男側から復縁を求める展開を示す話はその他三五段、一一二段に見られるが、そこでは女の返歌は記されていない、つまり返歌を得る展開を示していないのである。また二一段、二二段では章段内で男女が復縁していく展開を見せるが、二一段は一度去つた女が再び男を思いはじめる過程は自発的なもので、女が去つた後、男は物思いに沈み独詠歌を詠むのみである。二二段も復縁に到る過程として女が男を思う歌を詠みかけていて、男側から復縁を求める展開を示す話とは性質を異にする。なお『大和物語』、『平中物語』では復縁を求める話自体が確認されない。I段左注では「いまやうのわかい人は、さしもあらで上すめきてやみなんかし」と「上衆めく」ことを否定的に捉えている向きがあるが、そのような「上衆めく」貴族の指標として、『伊勢物語』をはじめとする先行歌物語に描かれ

る人間模様があったのではないか。既存の歌物語との重複や同調でなく、それらとは風合いの異なる多少大胆な展開こそ、「とよかげ」の個性であったと考える。そしてその先行歌物語からの若干の飛躍という志向性は、以後の展開にも確認されるものと考ええる。

## 〔Ⅱ段〕

宮仕えする女との関係を扱ったこの話は、内容上前後に分けられる長大な章段で三、四、五番歌までが前半、六、七番歌が後半となる。前半は豊蔭になびくことのない女が次第に心を開いていく展開を示し、これはⅠ段の主題の延長と見做されるものである。後半は「をんなのおやきゝて、いとかしこいふときゝて」と、前半から連続する女の、親が恋愛に介在し、反対してくる展開を示している。先行歌物語において親が介在してくる話は、『伊勢物語』の四〇段、『大和物語』の七六段、『平中物語』の二四、二七段が挙げられるが、それらの章段は権限を持つ親の制止によって、関係が成就に至らないという共通する展開を示している。なお、『伊勢物語』一〇段のたのむの雁、六九段の狩の使いの話は、親が二人の関係発展に際し、反対する展開を示すことがないが、一〇段は母親が娘を高貴な身分の男に嫁がせたいという野心を持つ設定の、東国を舞台にした話であり、京における男女の恋愛とは性質を異にする。また斎宮との密通を示唆する六九段も、斎宮の親は男をもてなすよう娘に指示しているが、親が禁忌の密通を許し、促していたとも思われない。この話も恋愛における親の介入の話とは区別して考えるべきであろう。

『伊勢物語』四〇段、『大和物語』七六段、『平中物語』二四、二七段のような、権限を持つ親の制止が描かれる話に対して、「とよかげ」の場合は、親の制止に屈せず「まだしきさまのふみをかきてやる」と、まだ女と関係を持っていないふりをした贈答を交わし親をだまし、秘密裡に恋愛を断行している。このような点も、従来の歌物語の話型を熟知した、若干強引ともいえる新しい展開の創作が考えられるのではないか。

### 〔Ⅲ段〕

大炊の御門渡りに住む女とのやりとりを扱ったこの話は、「ひとおほかりけるなかに、をとこの、いへのまへをつねにわたりて、ものもいはざりければ、女」と豊蔭が、男性を多く通わす女の許に通わない状況が示される。<sup>(12)</sup> 先行歌物語における不実な女性との関係を扱った話は『伊勢物語』の四二段、一一段、一二二段、『平中物語』の三四段などが挙げられるが、そこではみな、恋心からその女への執着心を振り切れない男の姿が描かれている。対して「とよかげ」では、別の男を通わす女に執着せず、一切通わないことにより、翻って女に男への執着心を抱かせる内容を展開している。『伊勢物語』では唯一、一九段に別の男を通わす不実な女性から、男自ら離れていく話が確認されるが、Ⅲ段ではそのような内容を撰取し、恋愛に対しひたむきで意志の強い男性を造形したものと考えられる。

### 〔Ⅳ段〕

「とよかげ、またしのびてすみわたりける人に、えあふまじくやありけん」と、関係を露見できない忍ぶ恋の話となる。先行歌物語において忍ぶ恋を主題とするものは、入内を予定された摂関家の姫君との禁忌の内容に仕立て上げられた『伊勢物語』三―六段が著名だが、他にも五三段、一一〇段、異本九段（阿波文庫本）も確認される。なお『大和物語』、『平中物語』には忍ぶ恋の主題の話は確認されない。『伊勢物語』類型話と「とよかげ」を比較していくと、結末の描かれ方に「とよかげ」の特異性が確認される。『伊勢物語』における同主題の話は、事情により女に逢えない男側が、悶々とした思いを歌で吐露する共通の展開をみせるが、その終末まで描かれた四、六段では、関係破綻の事態のち、終焉の状況に対する男の絶唱をもって話が閉じられる、というのがその流れであり、女側の男への思い、歌が示されることはなかった。しかしⅣ段では二〇番歌で女側から「わすれなまはとおもふをりにこそありしにまさるものおもひはずれ」と関係終焉を嘆く歌が詠まれ、二〇番歌詞書では「あしたになほかなしければ」と、終焉時の女の心境までが記されている。

従來の女を失つた男のみの哀切ではなく、女側の男への執着心を描くことで、両者相愛を強調した結末として、ここも従來には見られなかつた新しい展開の創作が考えられてくるのである。

〔V段〕

先ほども確認したように従來前後半に分かれる狭間に位置すると見られてきた段だが、内容面には検討すべき問題がある。この段では豊蔭と「うちわたりなりける人」、女童「のべ」の三者が登場し、豊蔭は初め主人の女に逢いに行く。しかし、「ひるよりちぎりけれど、女はえしらで、たゞのべにのみあひてあるに」と、昼から約束をしていたにも関わらず、主人の女はそのことを忘れていて逢えず、その後豊蔭は「のべ」と関係を持っている。その展開からすれば下仕えの童ではあつても、「上衆めく」ことのない「のべ」との熱情的な恋愛へと發展していきそうだが、続く豊蔭の詠歌は、

しる人もあらしにかへるくずのはのあきはてがたのべやしるらん（二一）  
まつむしのこゑもきこえぬのべにくる人もあらしによさへふけにき（二二）

と、二首とも主人の女に逢えない寂しさを詠んだもので、関係を持った「のべ」への思いが全面に示されているわけではない。先行歌物語において、女童との恋を主題とした話は『大和物語』の三九、四〇、一三四段が挙げられる。三九段は源正明が伊勢の守衆望の娘に通つていた際に女の家にいる「うなる」と関係を持つ話で、正明は歌で「うなる」への切ない思いを示しており、一三四段は先帝が御息所に仕える女童と関係を持ち、先帝は女童へ「あはれ」の思いを詠み伝え、後に主人の御息所に見つかり女童が譴責される展開を示している。

豊蔭と「のべ」の関係はこれらに比べれば、二人の深い関係が示されている内容というわけではなさそうである。また、IV段まではすべて、歌物語の代表ともいえる『伊勢物語』の内容が踏まえられていたのに、この段はそれが確認されないことも注目される。「またのとし、このべがしにければ」と翌年「のべ」が死んだ後に示される二三番歌左注の、身分

卑しい者のことはみな忘れてしまった、という内容も、先行歌物語に例のない新たな展開として、ひたむきな恋愛を志向する内容という点で、筋の通った豊蔭像がI段からIV段まで描かれていたのに対し、交情のあった女のことを忘れるという点、軽薄な印象を抱かざるを得ない異質な内容といえる。そのような点から従来、ここは前半の跋文のように見做されてきたのだが、稿者はこの段において豊蔭が「おきな」と称されている点と、章段内容の変質との関係を重視する。

### 三 構成意識の変質と呼称の関係

「とよかけ」各段における豊蔭の呼称を列挙すると次のようになる。

I段	1 番歌	とよかけ	V段	21 番歌	おきな
	2 番歌	／		22 番歌	／
II段	3 番歌	とよかけ		23 番歌	／
	4 番歌	／			
	5 番歌	／	VI段	24 番歌	おきな、をとこ
	6 番歌	とよかけ		25 番歌	／
	7 番歌	／		26 番歌	／
III段	8 番歌	とよかけ、をとこ		27 番歌	をとこ
	9 番歌	をとこ		28 番歌	／
	10 番歌	／			
	11 番歌	とよかけ		29 番歌	しさう

## IV 段

12 番歌 とよかけ

13 番歌 /

14 番歌 しさう

15 番歌 /

16 番歌 しさう

17 番歌 /

18 番歌 おきな

19 番歌 おきな

20 番歌 とよかけ、をこ

## VII 段

30 番歌 /

31 番歌 とよかけ

32 番歌 /

33 番歌 おきな

34 番歌 /

35 番歌 おきな

36 番歌 /

37 番歌 おきな

38 番歌 おきな

39 番歌 /

40 番歌 おきな

## VIII 段

41 番歌 おきな

見ていくと、V 段以降「おきな」や「しさう」の呼称が多い。しかし VII 段三二、三三番歌には「とよかけ」呼称もみられる。このあたりの呼称の違いについて注目したい。

とよかけ、なかのみかどわたりなりけるをんなを、いとしのびてはかなきところにてまかりて、かへりてあしたに

かぎりなくむすびおきつるくさまくらこのたびならずおもひわするな (三二)

かへし

くさまくらむすぶたびねをわすれずはうちとけぬべきこゝちこそすれ (三三)

Ⅶ段は中御門渡りに住む女との話で、豊蔭は女を「はかなきところ」に盗み出している。女を盗み出す主題を扱った話は歌物語に多くみられ、『伊勢物語』は有名な六、一二段、また異本二段(阿波文庫本)、『大和物語』にも一五四、一五五段に確認される。そしてこれら先行歌物語の女を盗み出す話は、逃げのびる途中で命を落したり、捕縛の身となったり、辺境での生活が耐えられず絶命するなどの、悲惨な結末にいたるのが、その共通する話型である。しかし、Ⅴ段三一、三二番歌では「はかなきところ」から無事に、問題もなく豊蔭も女も帰宅している。その点を重視すると、ここもⅠ段からⅣ段同様、先行歌物語を踏まえつつ、「とよかげ」独自の新たな展開を志向したものと考えられてくる。また、ここは伊尹の弟兼通と本院侍従の恋を「男」、「女」として描いた『本院侍従集』において、女が別の男に盗まれてしまう話と表裏を成しているものとの指摘が『注釈』にある。物語上の虚構の可能性もあり検証を要するが、この見解を考慮すれば、事実を題材にした伊尹による歌物語創作の状況も想定されてくることである。

しかし、Ⅴ段は以後の展開には問題がある。三三番歌以後、豊蔭の呼称は突然「おきな」に統一される。また、女を盗み出す話であったにも関わらず、三五番歌詞書は「おきな、この女のもとにきぬをわすれて、とりにやる」とて、三八番歌詞書は「おきな、山とよりかへりて、女のもとにやる」と、場面が変わっている。加えて、相愛の関係でやりとりされていた三一、三二番歌から一転し、それ以後は、豊蔭に対しての女の否定的な詠歌の応酬が続いている。呼称の変化とともに、明らかに展開内容にも変質が見られることになる。そして、このような呼称及び展開の変質箇所は前半部に位置づくⅣ段にも確認される。

忍び逢いの展開を示すIV段は、『伊勢物語』の四、六段等の内容を撰取しながらも、独自の展開を有することを前章で確認したが、この段には「しさう」、「おきな」呼称が章段の途中に存在している。このうち「しさう」呼称は、一六番歌詞書に「このしさう、おなじ女の本にまかりて、まだよぶかきにいで、まだしかりけりとて、かへりいりて、あけてまかりかへりて、うつろひたるきくにつけて」とあり、また段は異なるがVI段の「しさう」呼称箇所モトの詞書にも「このしさう、おなじ女のもとにまかりたりけるに、をんなのけしきやいかゞありけん、たちながらまかりかへりて、又のあしたに」とあり、「とよかげ」中全九例見られる謙讓語「まかる」がこの呼称に集中的に使用されている。また、IV、VI段「しさう」呼称は文章表現の点でも酷似しており、呼称の変化をも含め、章段における異質性は際立っている。

このおきな、かくいひつゝ、心やすくもえものいはぬことをおもひなげくに、またあらはれたる人もあれば、それにもつゝむなるべし、つねにもえあはで、からうじて

つらかりしきみにまさりてうきものはおのがいのちのながきなりけり（一八）

つゝむ人あるをりにて、かへりごともなかりけり

おきな つねにうらみて、人にはいはずいはみがたといへりければ、女

なにはがたなにかはつらきつらからばうらみがてらにきてもみよかし（一九）

といへりけれど、をとこありければ、えいかず

続くIV段一八、一九番の「おきな」呼称箇所に着目すると、そこでは豊蔭の行為が「えものいはぬことをおもひなげく」や、女を「うらむ」などとあり、これまで確認してきた、諦めずに女から返歌を詠み出させる、親の制止に屈しない、不実な女から自ら離れていく、など筋の通った厳しくひたむきな男性像として描かれていた豊蔭の行動とは見做し難い行為が目につくようになる。他にも「男ありければ、えいかず」と他の男性の存在を気兼ねする点など、「とよかげ」呼称箇所

所とは異なる、貫禄のない軽薄な姿が描かれているといえる。

また、「おきな」呼称箇所から「とよかげ」呼称箇所をつなぎ目にあたる二〇番歌詞書には「このをんなとよかげにかくしのびつゝあるも、びなき人<sup>びなき人</sup>にやありけん、きく人のいみじういひければ、このことやみなむなどちぎりて、あしたになほかなしければ、をとこにやりける」と女が不都合な状況であることが説明されるが、ここでいう「便なき」状況というのは、「おきな」呼称箇所から続く別の男のことなのか、それとも違う状況をいうのか読み取りにくい、不自然な連続表現と思われる。別の男のこととして連続した書きぶりをせず、改めて「便なき人にやありけん」と提示するあたり、「おきな」呼称箇所の内容とは異質な場面の意識で書かれた内容とも考えられるが、このような脈絡の不具合自体は、書き記す側の断絶の状況が考えられてくる。また二〇番歌以降は別の男の問題は描かれなくなるが、そうになると、「おきな」呼称箇所では豊蔭は別の男が通うため消極的に何もしなかったことになり、Ⅰ段より展開されていた豊蔭像とは異なる卑屈な人物像がここだけ浮き彫りになることになる。つまり、「おきな」呼称箇所が内容に幅を持たせるための話の書き足しであったとしても、異質な豊蔭像を有し、またその箇所のみで内容が区切り得るこの状況は、Ⅰ段から一貫していた豊蔭像に抵触する性質を露見することになるとみられるのである。

このような「とよかげ」における「おきな」呼称箇所をすべて採り上げてみると、その内容面において共通する性質が存することに気付かされる。それは「とよかげ」呼称箇所の内容、豊蔭像に対し、批判性を有していると思われるような軽薄かつ戯画的な内容、豊蔭像が示されている点である。Ⅵ段は「おきな」呼称からはじまる章段で二四番歌「おきな、にしの京わたりなりける女にものなどいひて、ひさしうなりにけれど、かへりごとせざりければ、をとこ」とあり、つれない女の心を開こうとする展開として、Ⅱ段前半部の主題と内容の類似した章段となる。しかしこの段では、女が男の思いを鑑み、ようやく返歌を詠み贈る二六番歌に続く二七番歌において、

をとこまかりそめてまたえまからで

くれたけのゆくすゑとほきふしなるをまだきよがれと人やみるらん(二七七)

と記される。女の心をようやく開いた矢先には、もう夜離れとなるのである。豊蔭歌は、あなたとは行く末長く連れ添っていく仲なのに、はやくも夜離れをしたと周りの人はみるでしようか、と安泰の関係性を伝えるが、脈絡を考慮すれば明らかに女への不実で軽薄な行為、対応と理解されるのではないか。また「とよかげ」最終Ⅷ段は、

このおきな、たえてひさしうなりにける人のもとに

ながきよにつきぬなげきのたえざらばなにゝいのちをかけてわすれん(四一)

おほやけごといそがしきころにて、これがゝへしをえせずこそなりにけれ

と、ここは以前関係があった女性への復縁の内容として、Ⅰ段主題との対応が意識される。「とよかげ」呼称のⅠ段では女の返歌を詠み出ださせた豊蔭であったが、最終段は返歌を貰えない豊蔭が描かれるのである。冒頭段の内容が類例のない新しい展開であり、その冒頭段がありながらこのような結末であるのは、Ⅰ段との何らかの対応(冒頭段と対極を為す展開の志向やパロディの志向)が考えられていたのではないかと思われてくる。

同じく「おきな」呼称を有するⅤ段は、従来「のべ」の死後に記される「そのをりはいとをかしとおもひけることゞも、ありけれど、ことなることなきひとのうへはみなわすれにけり」の二三番歌左注が、Ⅰ段からⅣ段までの内容、豊蔭像と異なる性質ゆえに一旦の跋とされてきた。しかし、この文における「その折」が指し示す内容は考慮すべきである。主人の女に逢えず「のべ」と関係を持ったのが前年の秋、「のべ」が死んだのが翌年の秋で、二三番歌の「訪ふべき」の表現より、豊蔭は一年の間「のべ」に通っていたことが想定される。つまりこの段は、二人の逢瀬の期間を省筆し描いていないことになり、脈絡を考えれば、「その折」が指示するのは「のべ」との交情の期間であり、その折(逢っていた一年間)

は趣深いと思つたこともあつたが、身分卑しい女童のことはみな忘れてしまつた、という内容であると理解される。左注はI段からIV段までの総括でなく、V段文脈と分かち難く結びついており、IV、VI、VII段の「おきな」呼称箇所と同様、矮小で軽薄な豊蔭像が描かれていると考えられるのである。

以上のように「おきな」呼称箇所は、展開、人物像が軽薄かつ戯画的であり、「とよかげ」呼称箇所の性質と一線を画する内容なのである。

#### 四 全体の形成

前章までは、「とよかげ」における先行歌物語の撰取状況、呼称の別と章段内容の性質を検証してきた。それらのことを踏まえていくと一つの推論が成り立つものと考える。それは、先行歌物語の内容を逸脱する展開、及び恋愛に対し厳しくひたむきであるという点で一貫性のある主人公像を描く「とよかげ」呼称箇所に対し、「おきな」、「しさう」呼称箇所はそれとは異質の意識のもとで作成された内容なのではないかというものである。つまり「とよかげ」は、まず「とよかげ」呼称のI、II、III、IV段の一部（一二、一三、二〇番歌）、VII段の一部（三二、三三番歌）よりなる原「とよかげ」というべきものが先に成つて、それ以後、別の人物によつて異なる意識のもとで、「おきな」呼称のIV段の一部（一八、一九番歌）、V段、VI段の一部（二四—二八番歌）、VII段（三三—四〇番歌）、「しさう」呼称のIV段の一部（一四—一七番歌）、VI段の一部（二九、三〇番歌）が増益されていったものと考えられる。

なお、呼称の別と章段内容の關係については古く丸岡誠一氏が指摘されていることでもあつた。<sup>13)</sup>丸岡氏は虚構物語の主人公に対し老人の呼称を用いることに疑念を持ち、「おきな」呼称箇所については、晩年時の病により伊尹の執筆が中断したものを、以後側近が変わつて付したとされ、伊尹と側近による共同執筆の可能性を指摘されていた。他者との共作の

可能性を示された点、重要な指摘と思われるが、「おきな」呼称箇所が、伊尹の側近の手によるものとした場合、急な呼称変化は明らかに唐突と思われる。場面展開に関しても前章で指摘してきたように、現代読んでも脈絡上不自然さを感じる箇所が多く目に付く。伊尹と同時代に、伊尹認知の側近が、このような付けたしをしたとは考えにくく思われる。これはやはり、伊尹没後の後年に増益されたものとすべきであろう。

また「おきな」呼称箇所については、『伊勢物語』についても触れておく必要がある。『伊勢物語』においても「おきな」呼称は、四〇、七六、七七、七九、八一、八三、九七、一一四段（和歌事例）にみられる。『伊勢物語』は増益の問題としても「とよかげ」と密接であり、片桐洋一氏による『伊勢物語』の成長論は著名である。<sup>(14)</sup>片桐氏は『伊勢物語』中の「おきな」呼称章段について、死んだ業平が翁となって自分に関わりないこととしながら昔の我が事跡を語ったり、相手を祝福慶賀する専門歌人的な立場で業平が章段に登場しているものとされ、段階的な成立の中で後年に形成されていった内容であると位置づけられている。<sup>(15)</sup>また、段階的な成立過程を踏まえた上で高橋文二氏も、「おきな」の役割、位置づけが作品が増益される時期によって異なる性質をそれぞれ有していることを検証されている。<sup>(16)</sup>

「とよかげ」と『伊勢物語』における作品としての性質の違いは当然考慮すべきであるが、構成意識の変質が、呼称の変化をもたらししているという面からも、「とよかげ」は『伊勢物語』に連なる歌物語共有の性質を備えているとみられるのである。

最後にここまで想定してきた増益形成の妥当性を、作品内における他の要因より検証しておきたい。この家集には「とよかげ」と伊尹没後に成ったと推定される他撰部を結ぶ次の一文がある。

おなじおきなのうたとてほかにみえしを、さかしらにつゝましけれどとて

本院の女御うせたまうて、またのとし、四月一日、じゞうのきみのもとに

ほとゝぎすこそみしきみがなきやどにいかになくらんけふのはつこゑ(四二)

この文は以下の他撰部の歌を提示する他撰部編纂者の一文と見做されるが、この文において「おきな」の行為が「みえし」や「さかしら」と敬意を用いず、「とよかげ」の部における主人公豊蔭の対応のままであることは注意される。つまりそれは「とよかげ」よりも成立が後になる他撰部が書き記される段階において、「とよかげ」に依拠した文が書き足されていることになるからである。この一文の存在を考慮にいと、原「とよかげ」が成った以後から他撰部が成立する間の期間においてもまた、原「とよかげ」に依拠した内容が足される可能性はあったと考えられてくる。そもそもこの文が、増益と推定した箇所と同じ「おきな」の呼称が用いられていること自体偶然ではなく、「おきな」の呼称が、伊尹没後で他撰部成立の時期周辺に、豊蔭を称する名詞であったことを物語るのではないかと思われる。

また、この文からは原「とよかげ」と増益箇所の構成意識の違いも読み取り得る。この一文では四二首以後に挙げられる伊尹本人の歌を「おなじおきな」の歌としているが、原「とよかげ」は伊尹の歌を豊蔭に仮託し、当然のことながらその出自を明らかにすることなく内容を展開していた。しかしこの一文では、伊尹のことを「おなじおきな」と示しており、即ち伊尹が豊蔭その人であることを明かしてしまっていることにもなる。つまり、他撰部編纂者が付したこの一文は、物語において伊尹が豊蔭であることは表出させない、という原「とよかげ」の設定を踏襲してはいないことになる。そこから類推すれば、「とよかげ」増益箇所の作者も、必ずしも原「とよかげ」の設定をそのまま踏襲した内容の書き足しをするとは限らず、原「とよかげ」とは性質の異なる内容を展開していくことは十分あり得たと考えられてくる。実際、今回増益と見做した箇所には、唐突な人称変化や展開、人物像の変容など、原「とよかげ」との差異が確認されたが、これらは原「とよかげ」の作者伊尹とは異なる、別の意識を持った者に拠るがゆえの現象と考えられるのである。

## 五 おわりに

本稿は「とよかげ」の段階的な成立を推定するものであるが、今回、原「とよかげ」と推定した箇所については、先行歌物語に例のない展開、これまでにない卑位卑官の主人公設定や一貫した男性像など、独自性の強い歌物語と見做し得る点、権力階層の文学的営みとして改めて評価する必要性を感じる。原「とよかげ」からは作者伊尹の積極的な歌物語創作の意識を読み取ることができよう。藤原北家の、特に師輔一門の周辺には『後撰集』撰集の十世紀中頃より、関わり深い私家集、作品が多数確認され、和歌を中心とした文芸への参画が注目されて久しいが、<sup>(17)</sup>個の作品一つ一つの精査により、巨視的な問題提起でもある撰閲家の文学活動の実態も明らかに成るものと考ええる。

また、内容、脈絡、呼称の観点から増益部と見做した箇所については、軽薄かつ戯画的な展開、人物像がみられることを確認したが、それがどのような立場から、いかなる意識によりなされたものであるのか、という形成過程についての検証も、原態論とは立場を異にして今後明らかにする必要がある。増益の問題は、片桐洋一氏の『伊勢物語』における成長論が著名であり、「とよかげ」はともすれば性急に歌物語における成長論の遡上に載せられる性質を有する素材だが、『伊勢物語』における増益についても、従前の作品論や伝本研究、業平家集との関係など、長きにおける検証が繰り返された上で、今日なお存否が検証されている問題でもある。「とよかげ」においても、本稿のみならず多面的な検証、吟味が必要となるものであり、その過程を経た上ではじめて歌物語生成の解明に資する素材に成り得ると考える。

・『一条摂政御集』の引用は『私家集大成』（明治書院）に、その他和歌引用は『新編国歌大観』（角川書店）に、『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠った。『伊勢物語』異本章段の段数は新編全集の通し番号を記した。また引用本文の表記は私に改めた箇所がある。

(註)

- (1) 「一条撰政御集の研究」『文学』第六号 第三卷 岩波書店 昭和一〇年六月。
- (2) 「一条撰政御集の成立に就いて」『日本文学史研究』六 日本文学史研究会 昭和二五年九月。
- (3) 「一条撰政御集について」『国語国文』第三四卷第一二号 京都大学国文学会 昭和四〇年二月。
- (4) 「一条撰政御集」前半部の物語性『平安朝文学探求』二松学舎大学南海ゼミ 昭和五四年。
- (5) 「一条撰政御集」論——「とよかけ」の部の特質——『詞林』第二号 昭和六二年一月。後、「とよかけ」の部の特質『歌語り・歌物語隆盛の頃 伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学』和泉書院 平成一九年一〇月。
- (6) 塙書房 昭和四二年一月。
- (7) その後の犬養廉氏校注書(『新日本古典文学大系28 平安私家集』岩波書店 平成六年二月)も『注釈』の理解を踏襲されている。
- (8) ①「とよかけ」の方法——I段からIV段の検討——『古典和歌論叢』犬養廉編 明治書院 昭和六三年四月。②「とよかけ」の方法(統)——V段からⅧ段の検討——『平安文学研究』第七十九・八十輯 昭和六三年一〇月。
- (9) 阿部俊子氏①「大和物語の成立に関して」『校本大和物語とその研究 増補版』三省堂 昭和二九年六月、②『校注古典叢書 大和物語』「解説」明治書院 昭和六一年二月。阿部氏は伊尹別当であった梨壺における『後撰集』撰集事業と成立の関連を指摘される。
- (10) ①目加田さくを氏「平仲物語の成立年代並に本文形態」『増訂 平仲物語論』武蔵野書院 昭和三三年五月。②萩谷朴氏「平中物語成立時期の推定と第三八段附載説話の解釈附作者試考」『平中全講』同朋舎 昭和三四年一〇月。
- (11) 『相如集』(一九・詞書「祓への使に、難波へ行きて、もとりと云ふ浮かれ女につきて」からの連続)「行く末はいのちも知らず夢ならでいづれよにかまたはさらは逢ふべき」(二〇)、『後拾遺集』詞書(卷一三・恋三・七二・赤染衛門)「男、恨むることありけむ、今日を限りにてまたはさらに音せじと言ひて出ではべりにけれど、いかにか思ひけん、屋方おとづれてはべりけるによめる」など、「または」が再度の意で用いられる和歌、詞書事例は多い。その他『古今和歌六帖』二〇九三(第四・涙河)、『伊勢集』一八、『兼盛集』一三〇、『千里集』一〇三、『惠慶集』一三八番歌などが、恋歌以外の歌中事例として挙げられる。二番歌は上の句からの脈絡を考慮すれば、再度の意で「または」が機能していると考えられる。

- (12) 傍線箇所については、(A) 女が多く男性を通わず、(B) 豊蔭が多くの女性に通う、の二説に分かれ、『注釈』は(A)、(B)とも在り得ることを示され、曾根氏は(A)、犬養廉氏は(B)の理解を示す。豊蔭が来ず嘆く女の八番歌「くもゐにはわたるときけど、ぶかりのこゑき、がたきあきにもあるかな」は、訪れの無い豊蔭を雁に仮託し、雲居に飛び立つ情景に重なるものだが、同時代において男性を雁に仮託し「雲居」に行くとする詠歌は男との疎遠の関係を意味するが、別の女に通うことまでを示唆するものとは判断されず(『後撰集』七七七・卷一・恋三・よみ人しらず)、雁や時鳥など鳥類を表現に用い、他の異性に通うことを暗示する場合、里を巡行するなどの別の表現が確認される(『斎宮女御集』一三三、『清正集』一七など)。また豊蔭の九番歌「くもゐにてこゑき、がたきものならばたのむのかりもちかくなきなむ」にみられる係助詞「も」は添加の意で、これは「頼むの雁(私)もまたあなたの近くで鳴こう」と他の男性の存在を類推させる助詞と判断され(『注釈』、注(8) 曾根氏論文①)、前後の段との照応からも(A)の理解が妥当と思われる。

(13) 「一条摂政御集成立私見」『文学論藻』一一号 東洋大学国語国文学会 昭和三年五月。

(14) 『伊勢物語の研究(研究篇)』明治書院 昭和四三年二月。

- (15) ①注(14)の書、「伊勢物語の方法と成立過程」②『伊勢物語の新研究』所収「伊勢物語に見る語り手の変貌」明治書院 昭和六二年九月。

(16) 「伊勢物語構造論の試み——「翁物語」の構造——」『駒沢国文』第九号 駒沢大学文学部国文学研究室 昭和四七年五月。

(17) 山口博氏「撰関家歌壇と私家集」『王朝歌壇の研究——村上冷泉田融朝篇』桜楓社 昭和四二年十月。

【付記】本稿は平成二十三年度和歌文学会第五十七回大会における口頭発表に基づくものである。席上御教示いただいた堤和博先生、発表後に御教示いただいた先生方、司会の労を取って下さった古瀬雅義先生に感謝申し上げます。